



Title	古墳時代銅鐻の生産と流通
Author(s)	高田, 健一
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 1997, 31, p. 1-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48095
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

古墳時代銅鐻の生産と流通

高 田 健 一

1 はじめに

古墳時代銅鐻の研究は、戦前には形態分類や編年を目的としたものが多く、歴史的な性格を論じる研究は少なかった。森本六爾は、弥生時代銅鐻に比べて古墳時代銅鐻の形態が画一的であることを指摘し、化学成分比においてスズ分の増加が認められる点に着目していたが、両者の質的相違を述べるにはいたらなかった(森本1929)。これに対して戦後から現在にいたる研究は、古墳時代銅鐻の歴史的意義をより高く評価する方向で進んできたといえる。今井堯は実用的形態から儀器的形態へという戦前の変遷観を引きながらも、権威のシンボルとしての古墳時代銅鐻の意義を説いた(今井1960)。また、杉山晋作は古墳時代銅鐻を畿内有力首長層から配布されるものと考え、副葬銅鐻の型式構成などに意欲的な解釈を示している(杉山1980)。さらに川西宏幸や松木武彦は、銅鐻に代表されるような身部に鎬をもつ定型的な鐻の出現を時代を画するものと捉え、畿内中枢政権が創出、配布した政治的威信財と評価している(川西1990、松木1991、1996)。

以上のような研究の流れは、古墳時代前期の政治システムや武器、軍事に関する研究とも関連して大きな成果をあげつつある。しかしながら、戦前の研究において主要なテーマであった型式分類や系統性といった問題は十分継承されていないように思われる。また、生産や流通過程の具体像に関してもまだ明らかにしうる点を残している。こうした問題に迫るために

小論では製作技術を主眼に据える。銅鏃の生産から副葬にいたるまでの過程には中央と地方の一元的な関係のみでは律しきれない側面が存在する点を明らかにし、威信財の生産と流通システムの具体像に迫りたい。

なお、本稿で用いる銅鏃の形態分類とその名称を図1に示した。

2 製作技術

鑄造品である銅鏃の製作工程は、鑄型製作、鑄造、整形、研磨の少なくとも4段階が考えられ、実際の観察においてもこの4つの工程の痕跡を把握することが可能である。まず製作技術が具体的にどのようなものであるか確認することからはじめよう。

(1) 鑄型製作・鑄造工程

すでに多くの指摘があるが、古墳時代の有茎銅鏃の茎端部には鑄造後に切断した痕跡を示すものと鑄放しのままのものとの両者があり、後者には鑄型が水平方向の上下左右にずれた痕跡をとどめるものが存在する（図2—1）。したがって有茎銅鏃の鑄型は、鑄放しとなっている個体の茎端部が鑄型の一方の末端となるような2枚の合わせ型が復元でき、弥生時代とほぼ同様の連鑄式を考えるのが妥当である。連鑄式とは、茎を湯道として数


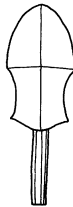



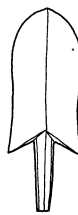
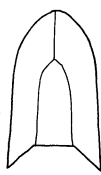
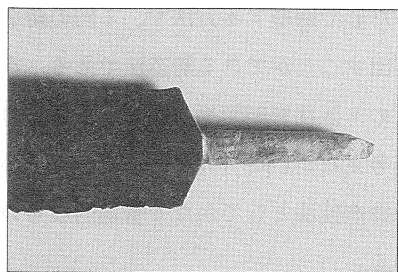
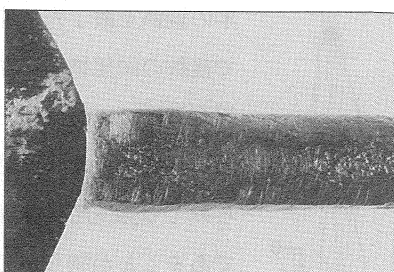
柳葉式	十字鎗柳葉式	篋被付柳葉式	定角式	十字鎗腸扶柳葉式	腸扶柳葉式	無茎式
						

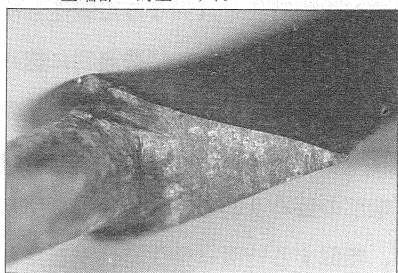
図1 銅鏃の分類と名称



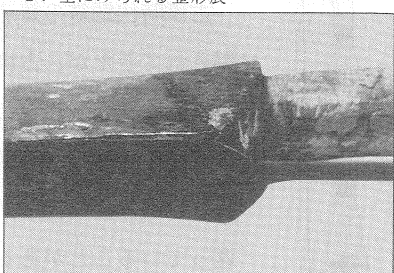
1. 基端部の鑄型のずれ



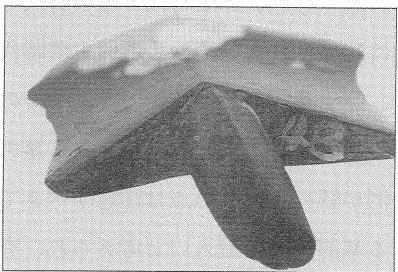
2. 基にみられる整形痕



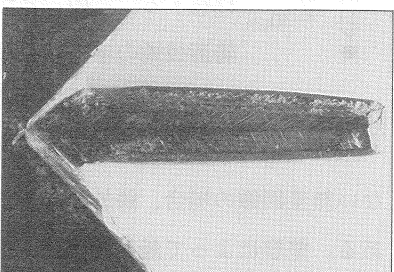
3. 基下端部に残る整形痕



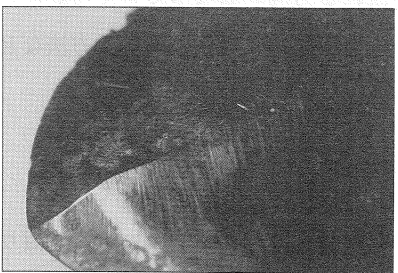
4. 刃部の整形痕



5. 逆刺内面の整形痕



6. 十字鑄腸挾柳葉式銅鐻の基



7. 鐻身の研磨痕



8. 無茎式銅鐻の研磨痕

図2 銅鐻の細部

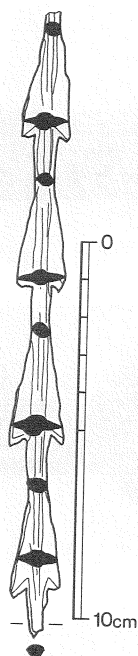


図3

連鑄式銅鏃 まま継承したものと評価できよう。ただし、湯道となる茎のない無茎銅鏃の場合、鑄放しのままの例が認められない点は注意すべきである。整形によって最も個体差が生じる基部が湯の流入口と考えられ、有茎銅鏃の連鑄式とは鑄型の構造や湯の流れる方向が異なっていた可能性がある。具体的には単品鑄造や枝状もしくは放射状に複数配列する方法などが考えられよう。

(2) 整形工程

鑄型からはずされた銅鏃は、茎の一定の長さのところで硬い工具で擦り切って単体にされた後、粗い削りによって形を整えられる。小論ではこの工程を整形と呼び、刃部を研ぎだし、鏃身表面を平滑に仕上げることを目

本の銅鏃を縦1列に連ねた形で鑄造する方法で、1回の鑄造で複数の同規格品を作り出すことができる鑄造法である。本村豪章は、伝滋賀県出土のヤス状青銅製品(図3)を銅鏃の鑄造状態を示す未成品と考えたが(本村1977)、近年の類例からみても弥生時代銅鏃の鑄造技法としてかなり普遍的なものであることが明らかである。

古墳時代銅鏃の鑄造技法が弥生時代とは異なる可能性も検討されてきたが、古墳時代の有茎銅鏃において普遍的に認められる鑄型のずれなどの鑄造痕跡には、弥生時代銅鏃やその未成品に共通した特徴を見いだせる場合が多い。たとえば鑄放しの個体の場合に、茎端部の鑄バリがめくれるように反り返っていることがあるが、類似する特徴は弥生時代銅鏃にも存在する。このことから判断すれば、弥生時代と古墳時代で鑄造技術の本質的な転換は認められない。むしろ、古墳時代の有茎銅鏃の鑄造技術は、弥生時代の鑄造技術の基本をその

的とした研磨とは区別する。以下その内容を最も一般的で数も多い柳葉式銅鏃を中心にみてみよう。

ここでいう粗い整形痕とは茎の面取りに典型的にみられるものである(図2-2)。古墳時代銅鏃の特徴の1つとして挙げることができる鏃身と茎の段差は、この工程で強い横方向の削りによってつけられている。鏃身と茎を明瞭に区別する点は弥生時代銅鏃にはみられなかった特徴である。茎全体に面取りが施され、鋳上りの状態よりも細くされるのは、矢柄に挿入するためであるが、古墳時代になって銅鏃の厚みが増すことや鏃身を研磨することとも関係があると考えられる。

茎の次に関の整形が行われる。整形痕がよく観察できる例からすると、関下端面には連続した表裏方向の削りが加えられ、関の外形ラインがS字状を呈するように整形されている(図2-3)。鏃身と茎の接点にあたる部分には、削り残しや削り過ぎと考えられる段がみられたり、関下端面が平らになって外形ラインが直線状を呈する例が存在するが、このことは、鋳型では関の形状が正確には確定されておらず、整形工程の作業結果に左右されるということを意味している。

また粗い整形痕は鏃身表面にも残されている。多くの場合研磨によって消されているが、部分的に消し切れていない例が存在し、研磨工程以前に鏃身の大きな形状が粗い削りによって作られている様子を窺うことができる。柳葉式などでは鏃身の厚みに微妙な変化がつけられているものがあるが、これは本来鋳型に施されていたものではなく、整形工程で形成されたものであろう。さらに、鏃身外形の曲線や切先の形状を整えるために、いったん刃部を研ぎだした後に刃をつぶして整形を施す例(図2-4)が存在する。このことから、銅鏃の製作工程における整形作業は、実用的機能よりも平面形の造作に重点をおいて行われていることが窺われよう。

工具は、砥石以外に鉄製のヤスリ状の細長い工具が存在した可能性も考

慮に入れる必要がある。滋賀県八日市市雪野山古墳出土の十字鎬腸扶柳葉式銅鏃のなかには、逆刺の内面を平らに整形しているものが存在するが(図2-5)、この整形によって茎まで削られているものがないことから、逆刺と茎の間に入る太さの工具が想定できるのである。

以上が整形工程の概要であるが、この過程で鑄上がりの状態にかなりの変形が加えられていると考えられる。逆に言えば、鑄型は原型や完成品を踏み返して得られる惣型ではなく、鑄型に直接型を彫り込む方法であり、かなり大まかなものを想定しておいた方がよいように思われる。銅鏃の完成品にみられる規格性は、おもに整形工程と次に述べる研磨工程によって生み出されるものであろう。製作上の基本的手順は柳葉式以外の他の型式の銅鏃でも同様と考えられるが、詳細にみると、型式によって異なる部分がある。例えば、柳葉式や十字鎬柳葉式や篋被をもつ型式は一般に茎の面取り数が多く、10面から14面程度に仕上げられている。断面形が円形に近くなるように茎を同一方向に回転させながら削っているため、明瞭な面を残さない例も存在するのに対して、定角式の場合には面取り数が8面前後のものが多い上に面が明瞭で、断面形がいびつな方形に近い例が含まれるようになる。また、逆刺部分に直接茎がつく腸扶柳葉式のような型式では、茎の両側から中軸に向かって対向する方向に削り込むため断面形が菱形に近いものが多く(図2-6)、茎の上面には整形がおよばない鑄放しの面がみられる場合がある。このような違いは、各型式の関の形状に規定された整形方法とも考えられるが、いずれ矢柄のなかに隠れて見えなくなってしまう部分にもかかわらず、丁寧に数多くの面取りが施される柳葉式など他の例では整形方法に対する意識の違いがあったことを窺わせる。

(3) 研磨工程

古墳時代銅鏃は、入念な研磨が施されていることが普通である。研磨は

仕上砥などによると思われる直線的な条痕を残すもので、研磨剤を使用したと考えられるような曲線的な研磨痕は存在しない(図2-7)。鐙身中軸から左右に研ぎ分ける方法が一般的であるが、刃部のS字状の外形ラインに常に直交するように研磨方向を細かく変えるものや、研磨痕が鐙をはさんで鐙身の左右で一定方向に斜行するものもあり、ある程度のバリエーションが存在する。原則的には刃部を鋭利に研ぎ出すことを目的としているといえるが、鐙身の長軸に平行するような縦方向の研磨痕がみられる場合もあり、鐙身表面を平滑に仕上げる効果も兼ねていたといえる。

いっぽう、研磨工程そのものが存在せず、鐙身には茎の整形痕と同様の粗い整形痕が認められるだけの例も存在する。福島県会津若松市大塚山古墳や京都府向日市妙見山古墳などから出土している腸挟柳葉式がそれである。このタイプのなかには、共伴する他の銅鐙とは異なって、規格が一定していなかったり、銅質が劣る場合が多い。また、研磨が施されていても、妙見山古墳出土の無茎式銅鐙のようにそれが不徹底で、研磨された平滑な面と研磨工程以前の整形痕が残る面とが斑状にみられる例も存在する(図2-8)。妙見山古墳出土の無茎式銅鐙は、ほとんどの場合研磨痕が縦方向のものであるため刃部の研ぎ出しを意図したものとは考えにくく、やや異質である。

(4) 小結

以上の観察結果から、古墳時代銅鐙は、連鑄式鑄型によって鑄造され、完成にいたるまでに整形や研磨作業に多くの労力がさかれていたといえる。とくに、各工程において平面形のバランスや表面の平滑さなど外見に関わる部分が重視されている状況が窺われた点は古墳時代銅鐙の性格を考える上で重要であろう。実戦で使用される武器というよりも、同一規格のものを多数そろえて見せることの方に意義が与えられた威儀具という松木や川

西の評価は基本的に正しいといえよう。

このような規格性の高い古墳時代銅鏃の出現には生産体制の刷新が指摘されているが、弥生時代とまったく技術的系譜を異にするわけではない点も重要である。素材におけるスズ分の大幅な増量や、弥生時代銅鏃にはほとんどみられなかったきめ細かい研磨工程が観察される点など新しい要素が存在するいっぽうで、鑄造には弥生時代の技術的系譜に連なる連鑄式鏃型が採用されているのである。さらに、柳葉式など主要な型式の銅鏃とは異なる整形方法や研磨方法、場合によっては異なる素材を用いて製作されたと考えられる例が存在するから、生産体制の刷新の程度や内容には、型式によって差が存在する可能性があろう。したがって、古墳時代銅鏃をすべてひとまとめにして同じ評価を与えうるかどうかには疑問の余地がある。以下、節を変えてまず系統区分と変遷の問題に取り組みたい。

3 系統区分と変遷

(1) 古墳時代銅鏃の系統区分

銅鏃の分類研究には、平面形や断面形をもとにした後藤守一の分類以来の研究史が存在する（後藤1919）。松木が適切に整理したように（松木1991、P.30）、銅鏃の分類は戦前の後藤や森本らが行った形態による細別分類を基礎としているが、戦後は今井による実用か非実用かといった性格を重視した分類や、杉山による鑄造法を考慮した分類などそれぞれの研究視点に即した独自の大別分類が行われることが多く（今井1960、杉山1980）、広く用いられうる分類は十分行われてこなかった。

このような状況のなかで川西や松木は、古墳時代銅鏃の成立過程やその意義を研究視点の中心に据え、鉄鏃との関連や弥生時代銅鏃との系譜関係といった観点を取り入れて体系的な分類を目指している。

川西は「類銅鏃式鉄鏃」として暗黙の内に銅鏃より後出すると考えられ

ていた鋳造りの鉄鍬（以下、小論では有稜系鉄鍬と呼称する）を大村直の指摘（大村1984）によって銅鍬の出現よりも先行するものとみなし、銅鍬の変革と定型化を有稜系鉄鍬との関係において論じた。すなわち、弥生時代銅鍬に系譜がたどれる「銅鍬系」と有稜系鉄鍬に系譜がたどれる「非銅鍬系」の2者に分離できるとしている（川西1990）。

いっぽう松木は、従来の鍬研究における分類の枠組みを再検討し、形態や法量や副葬状態から推定される鍬の本質的な機能や用途を系統区分として分類視点に取り入れるべきことを主張した。その結果、古墳時代前期の鉄鍬を実戦的形態で弥生時代の系譜を引く細根系、大型扁平な平根系、多面体に加工された小型厚手の有稜系の3系統にわけて理解している。後2者は出現の時期が異なるが、いずれも儀器的性格が強く、地域性の枠を越えて流通していることから首長間で取り交わされた威信財の可能性が高いという。そして古墳時代銅鍬は、儀器的性格の強い2者のうちより斉性の高い有稜系鉄鍬を鋳造による大量生産方式によってさらに充実させたものであるとするが、弥生時代以来の簡素な形態を受け継ぐ系譜も残存する点も指摘している（松木1991、1996）。

両氏によって示された見解は、内容的に異なる部分もあるが、古墳時代銅鍬を有稜系鉄鍬と弥生時代銅鍬との関係によって大きく2系統に分ける点で一致している。筆者もまた、古墳時代銅鍬には有稜系鉄鍬をモデルに製作されたものと、弥生時代銅鍬を直接の祖形とし、系譜的に連続するものの2系統が存在すると考える。柳葉式、篋被付柳葉式、定角式など銅鍬において主要な型式の祖形となる有稜系鉄鍬は、一部が庄内式併行期に出現しており、京都府山城町椿井大塚山古墳などの類例から、古墳時代初頭にはその多くが成立している状況を窺うことができる。

いっぽう、無茎式や腸袂柳葉式の例は、形態や素材の点で弥生時代の類例に直接の系譜を求めうるものが存在している。とくに無茎式の場合には

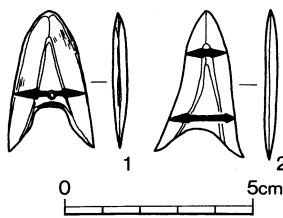


図4 弥生時代の無茎銅鑑

弥生時代例（図4）との系譜関係が明瞭である。

無茎式銅鑑は山陰から北陸にかけての日本海沿岸地域に類例が比較的多く存在することから、

この地方独自の銅鑑とみる研究者は多い（田中1986、森井1985）。弥生時代に各地方で独自に製作されたと考える銅鑑はこれ以外にもいくつ

か指摘できるが、いずれも古墳時代に残存せず、古墳時代銅鑑との形態的関連も薄い。そうしたなかで無茎式銅鑑のあり方はむしろ特異ではあるが、弥生時代の地方色のある銅鑑が古墳時代に継続して生産されている点は重要であろう。

先にみたように、このような2系統には製作技術の点でも差が存在する。形態による系譜と製作技術が対応することから、それぞれの系譜の製作者は異なっていた可能性が高いといえよう。

つぎにそれぞれの系譜がどのような変遷をとげているのかみてみよう。

（2）古墳時代銅鑑の変遷

柳葉式など類例が豊富なものは、製作技術とくに整形工程の省力化を背景にした型式学的変化に基づいて新古の序列を推定できる。まず個々の型式を検討することからはじめよう。

古墳時代銅鑑のうち最も多数を占める柳葉式（図6—1～6）は、関の平面形態に最も大きな個体差がみられ、それは関部分の厚みと対応関係にある。すなわち関の位置が高いものほど厚いものが多く、逆に関の位置が低いものほど薄いものが多くなるという関係がみられるのである（図5）。前者には岡山市浦間茶臼山古墳出土例（1）のように関下端部を曲線的に整形して外形ラインをS字状に仕上げるものが多いのに対して、後者には奈良県桜井市メスリ山古墳出土例の一部（6）のように外形ラインのS字

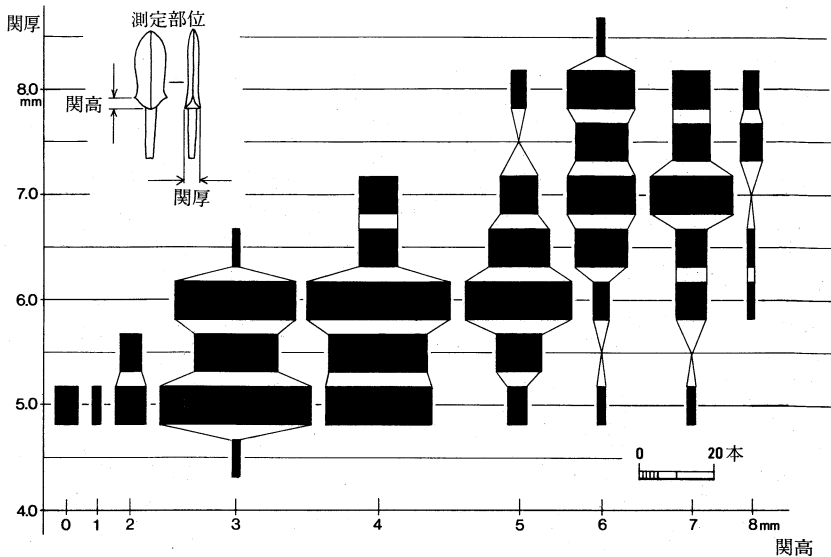


図5 柳葉式銅鏃の関厚と関高の関係

状カーブが明瞭でないものが多数を占める。また、前者の鏃身には平面形に対応した厚みの変化がつけられており、鏃身と茎との段差が大きい、後者ではそうした特徴が顕著でない。関の位置が高く厚いものは整形や研磨がきわめて丁寧であり、製作工程において整形、研磨作業の比重が高いとみられるのに対して、関の位置が低く薄いものは整形作業にかかる労力を大きく省略し、鋳型製作段階においても扁平なものを目指したものと考えられよう。鏃身が薄いものには茎との段差が痕跡程度にしかないものが存在し、矢柄に装着するために茎を細くするという本来の意義が失われて形骸化していることから、関の位置が高く厚いものから関の位置が低く薄いものへ、整形作業を中心に製作工程の省力化へ向かう変遷を考えることができる¹⁾。

関部分のこうした変化に対応して、鏃身の各部分でも整形工程の省力化ないし技術的な低下を読みとれる場合がある。たとえば、雪野山古墳出土

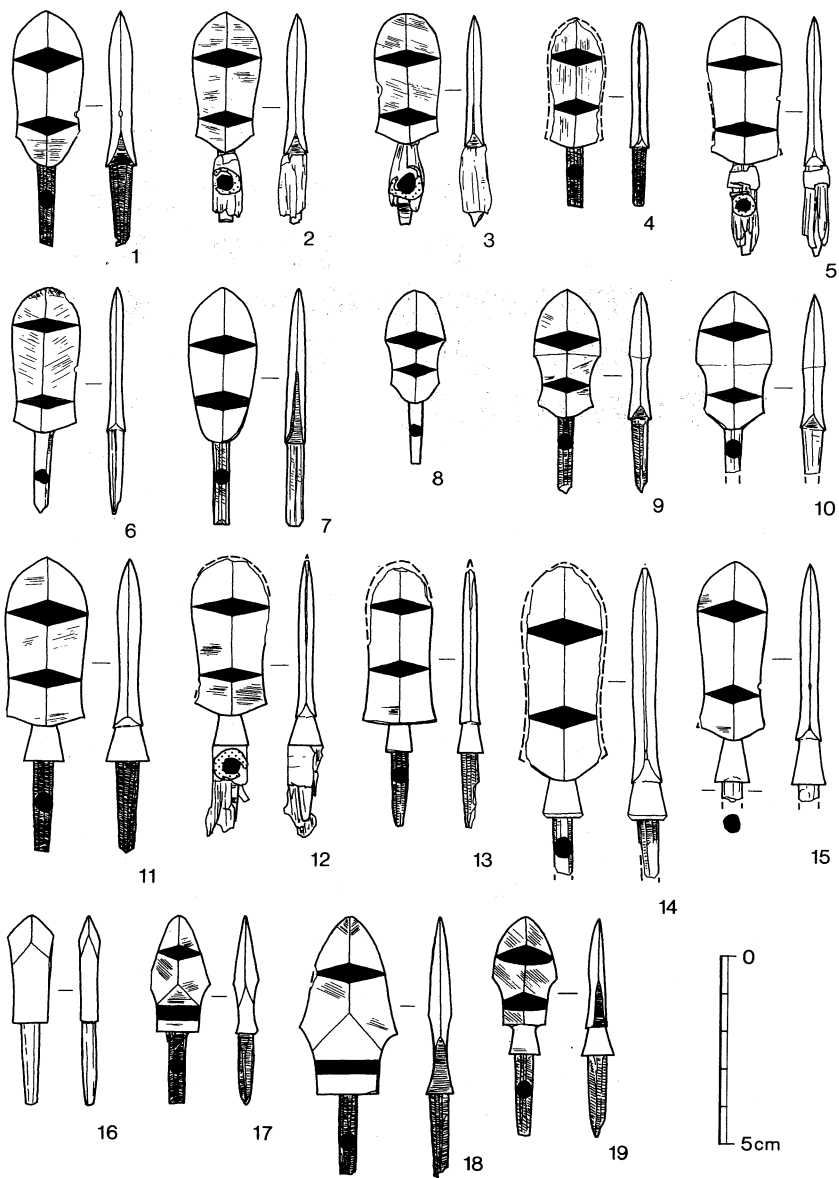


图6 铜剑实测图(1)

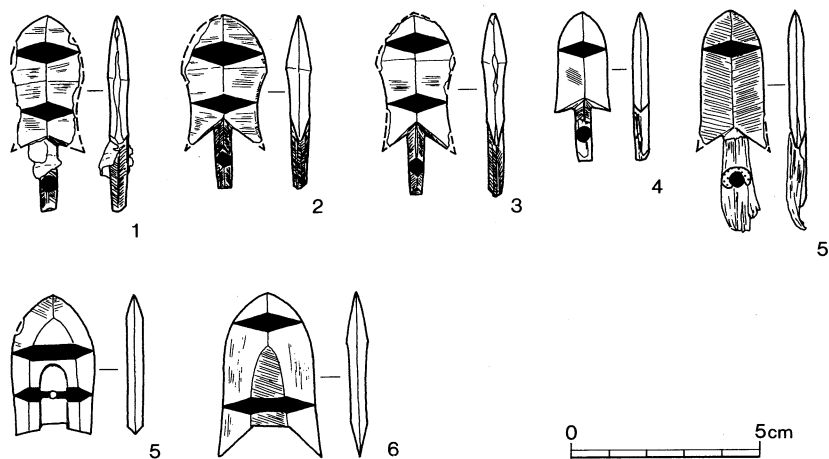


図7 銅鏃実測図(2)

例(3)には、刃部が内湾する部分において、いったん研ぎ出された刃をつぶして整形を施し、外形ラインを便宜的にS字状に整えたものが存在する。こうした整形の特徴をもつものは、他の例(2)に比べて鏃身が扁平で、切先が丸みを帯びている。切先部分は、そこに接続する別個体の茎や湯口が存在したと考えられるから、関と同様に加工度合いが大きい部分であり、本来の尖った形状にするためには入念な整形の労力が必要になると考えられる。そうした労力を放棄した結果、切先の形状が丸くなるのであろう。

松木は、古墳時代銅鏃の最大の特徴を形態の規格性に求め、鏃身外形を構成するS字状カーブが弛緩するもの、著しく大型化するものなど規格からの逸脱の程度によって型式学的な新古の序列を示しているが(松木1992)、それは整形工程の省力化という観点からも説明でき、妥当であるといえよう。

同様な変遷は、十字鎗柳葉式銅鏃(8~10)にも当てはまる。平面形か

らみると、石川県七尾市国分尼塚古墳（8）や群馬県前橋市天神山古墳から出土した例が初期の例に位置付けられる。いずれの資料も全容が未公表であるため詳細は不明であるが、公表された資料による限りでは、関の位置と厚みの関係は柳葉式銅鏃と同様の結果が得られることから、基本的には柳葉式に対応した変遷が考えられよう。現在知られている限り浦間茶臼山古墳のような最古段階と考えられる古墳から出土した例がないため、柳葉式の出現よりは若干遅れ、柳葉式をモデルに新たに生み出されたタイプと考えておきたい。

篋被付柳葉式（11～15）も比較的多くみられるものである。このタイプも基本的には上記と同様な変遷を考えることができるが、変化の方向性がことなる2系統が存在するようである。まず1つは、浦間茶臼山古墳出土例（11）を最古段階とし、雪野山古墳出土例（12）のように切先の鈍化、鏃身の扁平化が進み、奈良県橿原市新沢500号墳副櫛（13）出土例のように扁平で鏃身外形ラインのS字状カーブが明瞭でないものにいたる系統である。いま1つは、奈良県桜井市茶臼山古墳（14）出土例を最古段階とするもので、前者よりは大形、厚手であり、やや細長い。神奈川県平塚市真土大塚山古墳出土例がこの系統に属すると考えられるが、後続する例として、奈良県天理市東大寺山古墳や同広陵町佐味田宝塚古墳出土例のような鏃身や篋被が細長く間延びした外形を呈するものが考えられる。この系統のものは、前者の系統が出土した新沢500号墳にも共伴して存在するが（15）、たがいに形態の違いは大きく、銅質にも違いが認められる。古墳時代前期初頭の時期とみられる浦間茶臼山古墳から前期末葉に近い時期の新沢500号墳までそれぞれの系列が追えることは重要である。

このような系統差は、定角式（16～18）でもみられる。兵庫県御津町権現山51号墳の発掘調査報告書のなかで野島永は、定角式鉄鏃の刃部形態の比較に基づいて、刃部が短く先端にかたよるものと刃部が長く鏃身長2

分の1程度になるものの2種類が存在し、前者は西日本でも瀬戸内地域に多くかつより古相の形態であると指摘した(野島1991)。銅鏃においても同様な刃部形態の違いが認められ、それは鉄鏃よりも明瞭である。刃部長の比率が小さいものを短鋒タイプ、大きいものを長鋒タイプとすると、短鋒タイプは妙見山古墳から出土した1点をのぞきすべて吉備を中心とした山陽地域にのみみられることから、鉄鏃における野島の検討を銅鏃でも裏付けるとともに、地域的な特徴を備えたものである可能性が高い。兵庫県加古川市聖陵山古墳から出土したと伝えられる例はその典型である(16)。短鋒タイプはその変遷過程が明瞭ではないが、長鋒タイプは、真土大塚山古墳出土例や妙見山古墳出土の小型品(17)のような刃部が直線的で切先が尖っている小型のものから、妙見山古墳出土の大型品(18)のように刃部が強調されて大型化し、佐味田宝塚古墳出土例のように平面形が細長く間延びした形態にいたる変遷が考えられる。妙見山古墳出土の大型品や佐味田宝塚古墳出土例には、刃端部がわずかに外反して刃部外形ラインがゆるいS字状を呈するものがあり、新しい時期の特徴ではないかと思われる。

以上は資料が比較的豊富なものであるためその変遷をとらえやすいが、他の型式については判断材料がそれほど多くない。比較的資料の内容が判明している型式について若干の検討を加えておくにとどめたい。

まず、十字鎬腸扶柳葉式(図7-1~3)には、細身で逆刺が小さいもの(1)と太身で逆刺が大きく発達したもの(2、3)が存在する。両者が共存する雪野山古墳出土例を中心に検討すると、前者は鏃身が比較的薄く、逆刺の内面に整形の際生じた稜が存在するのに対して、後者は鏃身が分厚く、逆刺の内面には表裏方向の整形が加えられ、前者にみられたような稜を削り落として平らに仕上げている。鏃身表面の研磨を観察すると、前者は中軸の鎬から左右に研ぎ分けるだけであるが、後者は刃部に沿って細かく研磨の方向を変え入念に刃の研ぎ出しを行っているものがある。柳

葉式などと同様に整形や研磨工程の省力化が進んだすると、後者から前者への変遷が考えられるが、類例を検討すると、雪野山古墳よりも新しい相の副葬品をもち時期的にも降ると考えられる奈良県天理市上殿古墳には後者のみが存在する(3)。同様に、副葬品の内容などから雪野山古墳よりも降る時期の静岡県磐田市松林山古墳や茨城県八郷町丸山1号墳などでもやはり太身のもの主流を占めているようである。このことから、このタイプでは、細身のものから太身のものへ逆刺を大きく強調する方向で変化したと考えられるが、かえって整形作業が入念になっていく点が柳葉式などとは異なっている。

ところで、このタイプと同一形態をとる有稜系鉄鏃は現在知られていない。愛知県清洲町朝日遺跡の弥生時代後期の包含層から類例が出土していることから、系譜が弥生時代に遡る可能性もある²⁾。

腸挟柳葉式(4、5)は、形態の規格が一定していないものが多い。整形、研磨方法や銅質も一様ではなく統一的な生産組織のもとで製作されたとは考えにくい。会津大塚山古墳から出土している例(5)が妙見山古墳出土例(4)などに比べて大形の部類に属し、刃端部が外反している点で新しい時期に属すと考えられる。

同様に、無茎式(6~8)は鏃や矢柄着装部分の形状などのバリエーションが豊富で、1系列内の時間的な変化とみることは難しい。刃部の幅が狭く、外形ラインが直線的な点で弥生時代例により多くの共通点を見いだせる椿井大塚山古墳出土の例(7)が古い形態と考えられるものの、他の例はそこからの型式学的な変遷をたどることが困難である。弥生時代においても同様なバリエーションが存在することから、生産のあり方自体が大きく変化してない可能性もあろう。妙見山古墳出土例(8)は刃端部が緩く外反しており、共伴する大型の定角式と同様の傾向を示すことから、刃部外形ラインの変化が変遷の指標になる可能性もある。

(3) 小結

個々の記述が煩雑になったので、ここで以上の記述をまとめておきたい。

古墳時代銅鐻は、祖形となるものの違いによって2種類に分けられる。すなわち、古墳時代初頭に強い儀器的性格をもって広範囲に流通する有稜系鉄鐻に系譜が求められるものと、弥生時代銅鐻に直接の系譜を求められるものの2者である。この2者は整形や研磨といった製作技術の面でも区別が可能で、前者に必ずみられる研磨工程が後者では存在しなかったり、質的に異なっている場合がある。素材の面でも、後者の場合明らかにスズ分の少ない合金が使用されている例がある。また、後者のうち無茎式銅鐻は弥生時代において地域性をもつものであり、古墳時代にも生産を継続している例とみなせよう。

その変遷は、基本的に製作技術の劣化、省力化という方向で理解可能である。当初厚みをそなえ、細部にいたるまで丁寧に製作されていた銅鐻は、扁平になって整形工程の労力を大きく省略するようになる。同時に、まず平面形の造作にかけられていた入念さが失われて鐻身外形の規範の崩れがはじまり、その次の段階には部分の誇張や大型化などの変容がすすむと考えられる。

いっぽう、変遷の方向は各型式レベルでみると、かならずしも一定ではない。篋被柳葉式や定角式などのように、基本的に同じ形態をとりながら異なる変遷過程を示す複数の系列が存在する例もあり、古墳時代銅鐻を統一的な生産組織のもとで一元的に製作されたものとみるよりは、複数の製作者の系統がある程度分散、独立して生産を行っていると考えの方が実情に即しているように思われるのである。さらに、無茎式、腸袂柳葉式の2者のように外形の定型的な規格が当初から認められないものが存在し、十字鎬腸袂柳葉式のように新しい時期になっても大きく変容をとげたりする例が現状では認められないものも存在する。これらは、有稜系鉄鐻を祖形

としない点からも、柳葉式など主要な系列とは異なる製作者によって製作された可能性があらう。

4 生産と流通の具体像

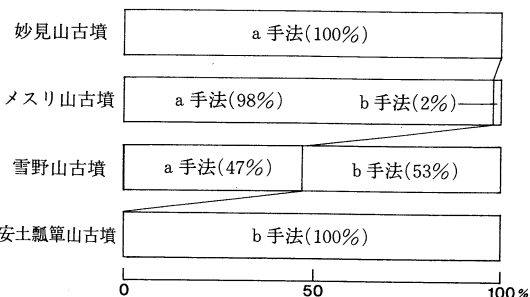
以上にみたように、古墳時代銅鏃はその祖形によって大きく2つの系譜に分けられ、さらに工人の系統差ともいうべきレベルで複数の系列が存在する。したがって古墳時代銅鏃は、分布の中心である畿内において、中央政権が一元的に管理し差配する工房で生産されたものというわけではなく、ある程度多元的な生産体制のもとで製作されたものと理解する方が妥当である。

では、その生産体制は具体的にどのようなあり方を示すのであろうか。また、製品の流通にもそうした多元性がみられるのであろうか。複数の工房から上納された製作品を畿内中央政権が統一的に配布するという流通形態であるか、生産体制と同様に多元的でありうるのかという点は、銅鏃そのものの評価のみならず、他の古墳副葬品の流通形態の理解や古墳時代前期の政治的なシステムの評価にもかかわってこよう。ここではそうした問題に踏み込んで検討していきたい。

考える手がかりとして、最も一般的で資料も豊富な柳葉式銅鏃を取り上げ、一括資料のなかで形態や製作技術上の差異がどのようにあらわれるかに焦点を当てよう。ある程度まとまった数量の柳葉式銅鏃が一つの埋葬施設から出土している場合、平面形や法量や製作技術上の特徴などが一致するもののみで構成されている例はそれほど多くなく、むしろ、2種類以上に分けられる場合が少なくない。そうした差は何に起因するのであろうか。

まず鏃身の研磨手法に着目してみよう。研磨手法は、最終的な研磨痕の方向によって分けると大きく3つに分類できる。すなわち、鏃身の中軸から刃部に向かって左右に研ぎ分けるa手法、研磨痕が鏃身中軸をはさんで

一定方向に斜行するb
手法、鐻身中軸に平行
して縦方向に研磨する
c手法である。研磨痕
が確実に把握できる例
を出土した古墳ごとに
みていき、各手法の構



成比を示したのが図8

図8 柳葉式銅鐻の研磨手法と構成比

である。これをみると、各古墳でそれぞれ異なる様相を示すことが分かる。たとえば、妙見山古墳で研磨痕が把握できた13本はすべてa手法によって研磨され、メスリ山古墳でもa手法が圧倒的多数を占めるのに対して、雪野山古墳にはb手法が用いられているものが約半数に達し、滋賀県安土町瓢箪山古墳では出土した7本すべてにb手法が用いられているのである。さらに、このような研磨手法の違いは形態の違いにも対応している場合がある。雪野山古墳では先述の刃つぶし整形が行われたグループにのみb手法が用いられているほか、上殿古墳では形態や研磨痕が確認可能な16本のうち1本だけc手法が用いられているものが存在しているが(図6-4)、a手法によって研磨されている他の15本(5)よりも小型で、形態や銅質に明らかな違いが認められる。

研磨手法のような微細な差は、基本的には製作工人の差を反映したものと考えられるが、一括資料ごとに大きな差がみられ、形態の違いや銅質の違いとも関連しているとすれば、単に工人個人の差に帰すべきではない。むしろ、工人の存在形態や流通の過程にそうした差があらわれてくる構造があったと考えることができよう。つまり、単一の工房内の工人差が分布や構成比率の差になったと考えるよりは、複数の工房の差があらわれた結果とする方が説明しやすい。

メスリ山古墳から出土した柳葉式銅鐻は236本と数量が多い上に、鐻身が厚く整形や研磨が丁寧な古い段階ものから、図6—6に示した例のように鐻身が扁平で整形が大きく省略された新しい段階のものまで幅広く存在するため、製作時期の幅が大きいと考えられるにもかかわらず、研磨がa手法によって施されるものに大きくかたよっている。研磨手法が区別されず、各工房でできあがったものを無差別に入手したとすれば、メスリ山古墳には他の研磨手法をもつものももっと存在して良いはずである。したがって、メスリ山古墳の柳葉式銅鐻は、入手経路が限定されていた可能性も考えられよう。また、上殿古墳で1本だけみられたc手法による研磨を施された個体のような少数派は、他の多数派とは異なる流通経路にのっていた蓋然性も高いと判断できよう。

さらに安土瓢箪山古墳には、柳葉式以外に他に類例をみない特異な形態の銅鐻が23本存在するが(図6—19)、その鐻身表面の研磨はb手法で統一されている。同じくb手法で統一されている柳葉式と共伴していることを考え合わせれば、この特異な例がb手法を用いる特定の工房で製作された可能性を考えることもできる。さきに述べた工房差とは、単に研磨技法を異にするだけでなく、こうした新型式を生み出して流通させるような独自性をもったものと理解したい³⁾。

このようにみえてくると、古墳時代銅鐻の流通もまた多元的でありうる。畿内中央政権が各地へ配布するといった、いわば公式なルート以外に地方首長間の交流によって流通したり、地方において再分配されるといった流通形態も十分想定できるのである。かつて杉山晋作は、副葬銅鐻の型式構成を検討するなかで、少数派となる型式を地方的な再分配の結果加わったものと考えたが(杉山1980)、今後製作技術上の特徴を綿密に検討すれば、具体的に証明できる可能性がある。また、数本程度副葬される銅鐻の意義を考察する手がかりともなろう。

5 おわりに

古墳時代銅鐻の生産と流通は統一的組織によって行われたものではなく、むしろ個別分散的でありうる。古墳時代銅鐻は形態が斉一的であり、その生産体制が弥生時代に比べて刷新されたものであるという評価は基本的に間違っていないと考えるが、斉一性や刷新の程度が銅鐻の素材や形態と関わって、一律ではない点が重要なのである。柳葉式銅鐻など主流となる系列の場合には高度な技術と豊富な素材の供給に基づいて生産されたと考えられるのに対し、無茎式や腸袂柳葉式銅鐻になると、製作技術や素材の面で弥生時代にみられた要素を引き継ぎ、主流となる系列とは技術や素材の交流を行っていない。

また、主流となる系列においても工人の系統差が存在し、それぞれがある程度独自性をもって生産をおこなっていることが推測された。以上のことは、銅鐻が畿内中央政権と地方との間を単線的に結ぶ役割を果たすだけのものではなくて、様々なレベル、地域で独自の社会的機能を果たし得たことを示唆するものである。副葬銅鐻の型式や種類の構成は、単一なものはむしろ少なく、多様なものが一般的である。したがって、このことは被葬者の生前の活動が地方に根ざしたものから政権の中枢に関わる分野まで多岐にわたっている可能性を示しているといえよう。

本稿は、1994年3月に大阪大学文学部に提出した卒業論文を書き改めたものである。執筆にあたっては都出比呂志先生、福永伸哉先生にご指導いただいた。また、資料調査や文献探索において以下の方々、機関のお世話になった。芳名を記し、感謝申し上げる。

稲田孝司、泉森皎、大庭重信、菊地芳朗、佐々木憲一、杉井健、清家章、新納泉、橋本達也、松木武彦、森下章司、吉村和昭、大阪市文化財協会、岡山大学考古学研究室、京都大学考古学研究室、京都大学文学部博物館、豊中

市教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、福島県立博物館（五十音順、敬称略）

最後になったが、大西吉之氏をはじめ編集担当の方々に多大な援助を頂いたことに感謝したい。

注

- 1) 柳葉式銅鏃の関の位置が高く、鏃身が肉厚なものほど古い形態であるという指摘は、浦間茶臼山古墳や権現山51号墳出土例の報告のなかで富田和気夫がすでに行っている（富田1990、1991）。
- 2) 包含層出土のため、これを古墳時代の混入品と考える研究者は多い。しかし、その形態は細身で逆刺が小さいものであるため、ここで考える変遷観と大きく矛盾しない。小論では朝日遺跡例を古い段階の例と位置付け、類例の増加を待って改めて評価することにした。
- 3) このような理解を支持するものとして、兵庫県豊岡市森尾古墳から出土した柳葉形銅鏃の事例（図6—7）を挙げることができる。これは、明確な関をもたず、刃部が鏃身の半ばまでしかない点で一般の柳葉式銅鏃の系列からははずれた存在である。森尾古墳には、このタイプの銅鏃が少なくとも3本存在するが、法量が若干異なるのみでこれと同一の形態をなす銅鏃が、ごく至近に存在する同県出石町田多地引谷10号墳第2主体から1本出土している。事例に限られるため、当該地域での生産、流通が想定される。同古墳群の時期や性格は、正式な調査報告書が未刊であることから十分明らかではないが、小規模な方墳が主流であって、三角縁神獣鏡をもつ森尾古墳よりは低いランクに位置付けられる。田多地引谷10号墳出土例は、森尾古墳の被葬者から分与をうけた可能性がある。

図版出典

- 図2 写真はすべて所蔵者の許可を受けて筆者が撮影させていただいたものである。掲載資料の3、7は奈良県立橿原考古学研究所の所蔵品である。
- 図3 本村1977文献より一部改変の上再トレースした。
- 図4 1は大阪府八尾市亀井遺跡出土、2は京都府峰山町大山墳墓群出土資料である。いずれも報告書より一部改変の上再トレースした。
- 図6 8、16をのぞきすべて筆者の実測による。8は石川県七尾市国分尼塚古墳出土、16は兵庫県加古川市聖陵山古墳出土資料である。それぞれ前田1996文献、北山1986文献より一部改変の上再トレースした。
- 図7 すべて筆者の実測による。

参考文献

- 今井堯 1960「銅鏃について」近藤義郎編『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会
大村直 1984「石鏃・銅鏃・鉄鏃」『史館』第17号
川西宏幸 1990「儀仗の矢鏃」『考古学雑誌』第76巻第2号
北山淳 1986「加古川市聖陵山古墳の埋葬施設の再検討」『神戸古代史』Vol.
3 No. 1
後藤守一 1919「銅鏃に就いて (一)」『考古学雑誌』第10巻第1号
杉山晋作 1980「古墳時代銅鏃の二、三について」『古代探叢一滝口宏先生古
稀記念考古学論集』早稲田大学出版会
田中勝弘 1986「銅鏃」金関恕ほか編『弥生文化の研究』9 弥生人の世界 雄
山閣
富田和気夫 1990「銅鏃」近藤義郎ほか編『岡山市浦間茶臼山古墳』浦間茶
臼山古墳発掘調査団
富田和気夫 1991「銅鏃」近藤義郎編『権現山51号墳』『権現山51号墳』刊行
会
野島永 1991「鉄鏃」近藤編『権現山51号墳』『権現山51号墳』刊行会
前田雪恵 1996「銅鏃」伊藤雅文ほか編『石川県考古学資料調査・集成事業
報告書 武器・武具・馬具 I』石川考古学研究会
松木武彦 1991「前期古墳副葬鏃の成立と展開」『考古学研究』第37巻第4号
松木武彦 1992「銅鏃の終焉」都出比呂志ほか編『長法寺南原古墳の研究』
長岡京市文化財調査報告書第30冊 長岡京市教育委員会
松木武彦 1996「前期古墳副葬鏃群の成立過程と構成」福永伸哉ほか編『雪
野山古墳の研究』八日市市教育委員会
本村豪章 1977「近江出土の異形青銅器」『考古学雑誌』第63巻第3号
森井貞雄 1985「無茎銅鏃の分布とその意味」森浩一編『考古学と移住・移
動』同志社大学考古学シリーズII
森本六爾 1929「銅鏃考察と本古墳出土例の占むる位置」森本『川柳將軍塚
の研究』岡書院
紙幅の都合により発掘調査報告書の引用は割愛せざるを得なかった。ご寛恕
賜りたい。

(大学院後期課程学生)